

編み袋の諸形態、用具論的に

中 村 俊 亀 智

一 まえがき	一六五頁	六 シヨイネコ	伊那宮田村	一九一頁
二 サラニップ	旭川市	七 ガマコシゴ	広島八鋒村	一九七
三 テサゲ	新庄市	八 テゴ	五箇荘・馬見原	一九九
四 カズラテゴ	村上市	九 アンツク	石垣島	二〇二
五 シヨイズカリ	秩父吉田町	十 あとがき		二〇五

一 まえがき

「編み袋」とは、この小論では、主として、山で働く人たちが山仕事にゆくとき、弁当や山仕事の小さな道具などをいれて背負つてゆく、または、腰につけてゆく山仕事用具のことをさす。

この種の編み袋は、実際には、テゴ、コダシ、コシゴ、スガリなどと呼ばれていて、なかには、むしろ「編みカゴ」と呼ぶのにふさわしいものも含まれるが、こゝでは仮りに「編み袋」によって統一しておこうと思う。

それなら、こうした編み袋には、どのような種類があるのだろうか。改めて、この点を『文部省史料館所蔵民族資

料図版目録第一巻』によって確かめみると、とりあえず、次の一〇種類に分れることがわかる。

一、主として、東北、裏日本に分布する山葡萄や山藤の蔓皮で編んだコダシの類、図版一二・一から一二・八、図版一三の二・三・五。

二、ツヅラフジで編んだ南九州のテゴ・オイコ、図版一三・六から一三・八。

三、東北、北陸の日本海側で使われているコダシの類、図版一四・一から一四・三。

四、縄を編んでこしらえたコダシの類、図版一四・四から一四・八、図版一五、図版一六、図版一七・一から一七

・五。これはほとんど全国的に使われている。

五 関東山系の東側に分布しているシヨイ・ズカリ、図版一七・六から一七・九、図版一八・一から一八・三。

六 俵編と同じ方法で作られた編み袋、たとえば、図版一八・四から一八・六、図版一九、図版二〇・一から二〇

・五。

七、阿蘇山麓地方のテゴ、図版一八・九、図版二一・七から二一・九。

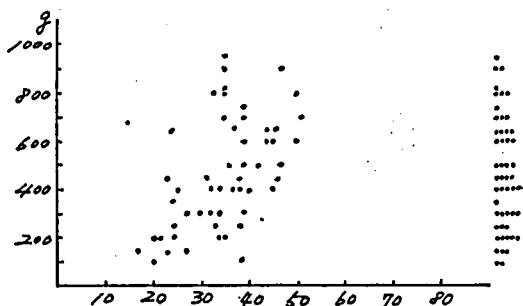
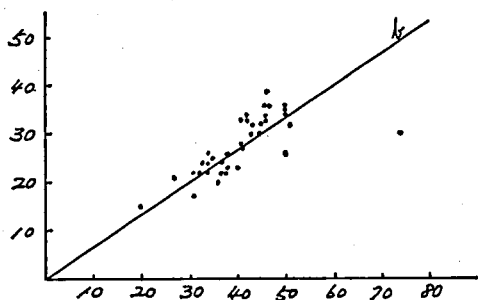
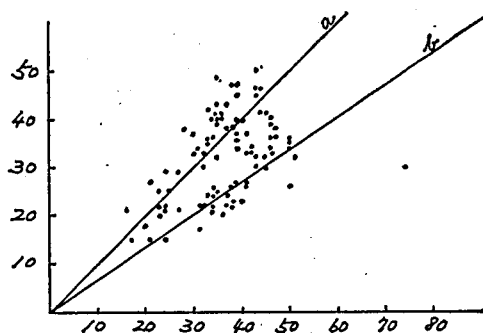
八、いわゆるネコ編の背負子、図版二〇・七から二〇・九。図版二一・一から二一・三。

九 岐阜県山間地帯のネコダ、図版二一・四から二一・六。

一〇、その他

そして、以上の資料の整理から、かつて全国各地の山村で、それぞれの地域特有の、地域性豊かな編み袋が使われていたらしいこと、それにも拘らず、編み袋の形や編み方には著るしい共通性が認められることなどが、直観的に、読みとれる。

それなら、以上の資料から読みとれる編み袋の共通性は、より分析的にはどのようなものであろうか。また、



第一図 編み袋のプロポーション

上は タテとヨコとの比, aは正方形, bはヨコとタテとの割合が3対2になったときの線
 中は 見た目ヨコ型のものの分布
 下は ヨコと重さ, いずれも横軸がヨコの値を示す。

豊かな地域性はどのような根拠から生まれてくるのだろうか。一つ一つの編み袋は、働く人たちのどのような暮らしの中から生み出されてきたのだろうか。編み袋の形、外観・編み方・用途のあいだにはどのような対応が成立つか。

この小論はそうした点を、できるだけ、実地にもとずいて確かめ、つきつめてみたものである。

その報告にはいるまえに、この過程で特に注意した点を予め述べておきたい。

(一) 編み袋には、使い方、作り方からみて、寸法や重さには、自から限度が考えられる。編み袋の全体の形は、ほとんど真四角型か横長の短形型で、奥行きには平らな型と直方体状の型とがある。第一図は、前記の『史料館所蔵民族資料図版目録第一巻』の数字をもとにして、縦と横との関係をみたものであるが、この図によって、縦横の値は二〇から五〇センチの間にあり、たとえ横長型でも縦横の割合はほとんど二対三の線にそって分布していることがわかる。しかし、実際、それぞれの編み袋を作る場合、編み袋の大きさ・寸法・全体の形などは、どのようにして決められるのだろうか。

(二) これに対して重さは、割合に、分散していることがわかる。このことは、たとえ編み方が同じでも、使う材料の質量によって全体の重さが異なる場合があることを考えさせるように思われる。編み袋には双子編 *twist* の型がいたって広く用いられているが、編み型は同じでも実際の作り方までたちいてみると、編み方にはより細かい型わけが必要になる場合もある。また、それぞれ、材料を用意するために、どのような手段がとられ、工夫がなされているのだろうか。採集の場から加工の場へ、何時頃、どのようにして運ばれ、材料はどのような注意で加工されるのだろうか。

(三) 編み袋は、「編む」という技術を主体にして出来上る。編・織・組の区別はかなりきわどい問題なのだが、こゝでは、ある長さ・幅・厚さの要素・材料を関係づける一つの操作の型をひとまとめに、「編む」といっておこ

う。編み袋は、主として編むという労働の型の規則的な繰返しによって成立つが、そのとき、どのような道具の助けによって、どのような順序で作業はすゝめられてゆくのだろうか。なお、こゝでは、編み袋の出来上ったものを基準にして、たとえば、それを机の上に立てておいたと仮定して、机の面に平行な要素をヨコ、垂直な要素をタテとしておこう。また、そのときの胴の前の面を前面、後の面を後面、両脇の面を仮りに左右面としておこう。因みに、このような規定によれば編み袋を編むときのタテが、そのまゝこゝでは「タテ」となるとは限らないことを注意しておこう。

(四) 編み袋の本体が出来上った後、それに負い緒をどうつけるのか、負い緒はどう結ぶか。いったい、編み袋には何をどれほどいれて、どれくらいの巨離を運ぶのか、そうした点にも注意してみよう。

(四) 一つの編み袋を編むのに、一般に、どれほどの時間がかかるのか、作るとき、どこに一番苦労するか、作業は標準化されているか。出来た編み袋は何年ぐらい使えるか。そうしたことについても作りとの兼ね合いで知っておきたい。

(四) 使う人の立場からみて、編み袋の利点欠点はどのようなところにあるのだろうか。古い型式の編み袋が捨てざられ、新しい型式のものに置換えられていったとしたら、その置換えはどのようにしてなされたのだろうか。

懇切な御指導をいただいた、市立旭川郷土博物館、山形県新庄市教育委員会、新潟県村上市磐舟文華博物館、埼玉県秩父郡吉田町教育委員会、埼玉県立博物館、熊本県蘇陽町役場、宮崎県立総合博物館の皆様、それに、直接お教えをいただいた、斎藤キメラブク、門野ふさ、杉村京子、其田良雄、西田幹夫、広野吉助、斎藤誠二、城倉国雄、向山雅重、大畑寅寿、山中芳男、山中雅文、小林茂、小林勉英、岡部真木子、松本伝、中矢富吉、秋田県立博物館準備室の木崎和広、埼玉県立博物館の大塚和義、文化庁の大島晁雄、宮崎県立総合博物館の沢武人、泉房子、琉球大学の饒

平名健爾諸先生に心からお礼を申し上げたいと思う。

この小文では、お教えをいただいた事項は、引用文献の場合と全く同じように、引用註記させていただいたが、私のとりちがひ、誤記をおそれる。間違いがあれば訂正させていただきたいと考える。

二 サラニップ 旭川市

「サラニップ」は、通常、「手提げ編袋」などと訳されている⁽¹⁾。サラニップには、大きさの点で、大小二つの型があるといわれているが、「編袋や編籠は、食糧を採集する量やその場所の巨離に応じ、運搬、貯蔵の目的に依じて大小種々ある⁽²⁾」というのが正しい言い方かと思われる。たとえば、ヤブマメを採集するために山へ持ってゆくサラニップは「シッタ・サラリプ（地面を掘る・手さげ袋）」、糸や針をいれる小さなサラニップは「ケモ・サラリプ（針・入る・手さげ袋）」と呼ばれていて、それぞれ形も異なるように思われる。

こゝにとりあげたサラニップは、割合に小さい型のサラニップで、山へ木の実やユリの根などを採りにゆくとき持ってゆくという⁽³⁾。「昔の人は頭にかけて背負った⁽³⁾」といわれているように、この型のサラニップは学者のいわゆる「頭頂部支持背負運搬（頭の頂の前方に負い緒をかけて背負う運搬）」の方法で使われていたという。こうした使い方が、サラニップの負い緒の構造にも深い影響を与えていると思われる。

一 かたち

こゝでとりあげるサラニップは、縦二六センチ、横二二センチ、奥行き一〇センチ、重さ二三八グラムで、全体としての形は直方体状である。しかし、全体から受ける感じはあくまでもしなやかである。

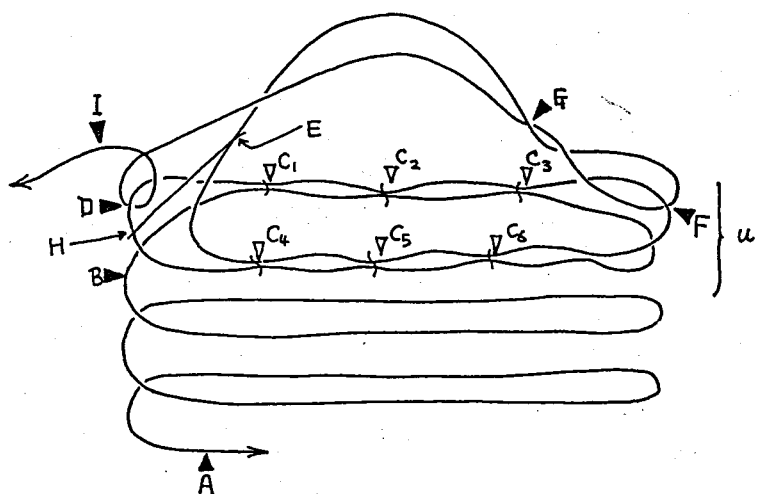
胴は太さ三ミリのタテの縄と、幅四ミリのヨコ紐から構成されている。編み方は双子編で、ヨコ紐でタテの紐を一

本ずつかぶってゆく、あのやり方である。ところが、このサラニップでは、胴の前後面は縦に三つのブロック、横の左右面は二つのブロックに区切られている。ブロックの区切りの役を果しているのは薄赤と黒とに染めわけられた幅一六ミリの紐の帯である。帯のまんなかには黒い紐、その両側には赤い紐が配られている。私たちの扱うような日常の編み袋では、このように染め分けた紐を組合せることも、それで仕切りをすることも、珍らしい手法といえよう。

いま、帯と帯とに挟まれた一ブロックのタテの本数を数えてみると、前後面では一三本ずつ、左右面では五本ずつで、前後面は三区劃、左右面は二区劃だから、全体のタテの紐の本数は一三×三に五×二で四九本、それに帯の分の本数三×三を足して、都合五八本であることがわかる。いっぽう、ヨコの紐は一五ミリの間隔でいれてあり、一〇段にかけられている。一〇段のうち二段では、タテの紐はまっすぐ通り、次の二段ではX字型に交錯し、また次の二段ではまっすぐ連子に、それぞれ各段に応じて、変化させ、装飾効果をかもしだしている。

底のほうは、まんやかに二本、幅四ミリのヨコの紐をいれ、それを挟んで左右に幅六ミリ、ないし、九ミリのやゝ幅の広い紐がいてあり、タテとヨコとは二つ潜り、二つ跳ねの網代に組んである。底廻りには太さ四ミリの紐が用心深く二重に廻してあり、底のヨコは、この底廻りの紐の目に、その端を縫い込んで、留めてあるように思われる。なお、胴の左右面のタテの紐も、下端は同じように底廻りの紐にかけて留められている。こうしたタテの紐の留め方は、サラニップの作り方と深く係り合っていると考えられる。

下から縁まで登りつめたタテの紐は、縁をかぶっている幅四ミリのヨコの紐の目を抜け、一度外へ出たところでU字型に绕められ、さつき抜けてきた目の左隣の目を潜り、四五ミリ出たところで切断されている。つまり、タテの上端は、縁をかぶる幅四ミリのヨコの目を抜け、一度サラニップの内側へ出、隣の目から袋の外側へと出るのである。こうした縁の作りも、サラニップ独特のものだということが出来るように思われる。もちろん外に出たタテの端は、



第二図 サラニップの負い緒の構造

AからBまで胴のヨコ
 BからFまで縁かぶり (三つ組部分)
 FからIまでさげ緒 (三つ組)
 Iから先は二つ組
 EHはさげ緒の手
 Cは縁のヨコへのかぶり目, uは縁部分。

そのまゝ飾りとしての意味も果している。

負い緒は幅一〇ミリ、厚さ四ミリで、三つ組である。緒の本体は平打ち、先端一〇センチほどは細い丸打ちである。ところが、よくみると、丸打ちの部分は二つ組で、三つ組を成りたゞせていた三本のうちの一本は、先から一〇センチほどのところで切断されていることがわかる。本体の三つ組部分は、縁を取りしきっているヨコの紐に、そのまゝ接続している。従つて、このサラニップに関する限り、ヨコの紐は、時計の廻りとは逆に、左旋回しながら胴を縁まで登りつめ、最後は結局負い緒の三つ組へとつながるのである。

再び縁の作りにもどり、最上段のヨコの目を注意してみると、ヨコの紐の目は、一つの目で、四本ずつのタテをかぶっていることがわかる。ところが、タテの本数は奇数だったから、一本余る計算になり、最後はタテ一本でヨコの目一つを独占する結果になる。そこで、余った一本をヨコの紐の二本に加え、負い緒の三つ組を構成するのである。負い緒の三つ組は、ヨコの紐とタテの紐との合作によつてはじまる。こうした手法もそれなりにたくみなやり方だといわねばならない。

負い緒の三つ組部分は、八ヶ所で、縁のヨコ紐に絡められ、ちようどサラニップの左右の面の上に出るよう工夫されている。その詳細については第二図のようである。なお、負い緒は、平三つ組のまゝでは、前後面の方向に振れがちになるので、手を出し、縁のヨコ紐にかけて支えている。この点もまたおもしろい工夫と思われる。

二 つくる

サラニップもまた、編むより、材料を調えるまでが一苦勞である。タテの紐はガマの屑糸を撚り合せて作るというが、ガマは「志キナ」といい、「真の草」の意味で、「ござを編む草をさす、ござを編む草はいろいろあるが、その中でガマが最も喜ばれるのでこの名がある」という。ガマの屑は幅五、六ミリ、長さ三〇センチ前後で、薄い紙のよう

にちりぢりになっているが、それを膝の上で、両手の掌で右手を上、左手を下にして緋い、長さ七〇センチから一四〇センチほどにまとめ、そうしてこしらえた糸を、まんなかから二つに折り、撚り合わせて太さ五ミリの紐にするのである。緋った紐はボロ切れでヨリをかけ、鉄で丁寧にケバを取っておく。

別にシナの木の皮を採ってきて、赤く染め、紐に緋っておく。出来上った紐は、総て本数を調べ、「二三本ずつ束にしておく。一三という本数がサラニップを作るときの単位になる」という。⁽³⁾その意味は前記のところからも了解できよう。

またヨコの材料はオヒヨウである。「オヒヨウ」は「オビウ」の音を写した言葉で、春の雪どけ時分、山へ出かけてゆき、木の根元に鉋で切れ目をいれ、立木から生きた皮を直接もらってくる。オヒヨウの内皮は泉や沼に浸しておき、一週間もして「どろどろになって繊維質ばかり残るから、それを取り出して、よく水洗いして乾竿に掛けて乾かす」「乾くと一枚一枚薄紙をはがすように剥がれるから、それを細かく裂いて、一本一本指の先で縫をかけながら繋合せて」糸玉を作るという。こうした基礎作業もまた大変な手数のかゝる作業なのである。

タテとヨコとを揃えたと、最初に底から編みはじめ、まだ作りかけの底を「天井から紐でつるし」⁽³⁾、天井に紐の端を結びつけ、その紐の下の端に長さ三〇センチほどの細い木の棒を水平にとりつけ、その棒に編みかけのサラニップの底をかぶせるようにして、つるすのだという。編みかけのサラニップは、ちょうどイカの足みたいに、タテの紐が垂れ下るので、タテをヨコ紐で双子にかぶりながら胴をこしらえてゆくのである。

サラニップの編み方には、「編具を使用する方法と、編具を使用しないで天井から吊るして編む方法」⁽⁷⁾とがあり、編み具を使う編み方は、かつて「シナノ木の皮ばかりで、草座を編むようにして、サラニップを編んだこともある」⁽³⁾、「シナノキなら、秋でも春でも冬でも、採ってきて編めばよいから、すぐ編もうと思えば編める」、サラニップは本

当は「楡の木で編んだのだが、楡がないので、ガマでこうして編んでいる⁽³⁾」というお話からも伺えるように、サラニップの編み方にも莫座を編むのと同じようにして、同じ道具を使って編むという型がかつて行われていたことがわかる。もっとも、莫座編み型のサラニップは、莫座のように、はじめ胴の部分を帯のように編んでおいて、その両端を綴じ合せ、上の口には負い緒、下の縁には紐を通し、最後に下の縁の紐を締めるので、全体としての形は円錐型といつてよい。

三 その他

莫座編の用具といえば、私たちは、人の字型の台の間に横木を渡し、それにコモズチを下げた形のを思い出す。しかし私たちがみせていたような莫座編の道具は、平らな箱の両側に短かいまっすぐな柱をたて、それに横木を渡した、一般にはみない、もっぱら室内で使うよう、うまく工夫した用具である。こゝではサラニップは女の人たちの仕事なのだが、こゝではサラニップは、誰かに教えられて、機械的に編み出すというのではなく、編む人は、編み方を誰からも教わらないし、教わりたくても、親でさえ教えてくれないという。作りたければ、いつさい見よう見まねで自分で習ってゆくしかない。こゝでは、もちろん、道具も自分で、自分の都合にあわせて作る。そして、技術を自然に身につけてゆくのである。そうした造形技術の習得法が、ごく当り前に、今でもまもられている。それは何もサラニップの場合だけに限られないが、私たちが、こゝでみてきたサラニップの数々の工夫も、実は、そうした造形技術の習得の型の積み重ねのなから、生まれてきたのだということができよう。

註

(1) 知里真志保・米村喜男衛氏「網走郷土博物館所蔵アイヌ土俗品解説」(『網走市史』上巻所収)一九頁。

(2) 岡村吉右衛門氏「アイヌ造形研究ノート」(玉川大学

編み袋の諸形態、用具論的に(中村)

文学部紀要『論叢』一〇四頁。

(3) 杉村キナブク氏、門野ふさ氏、杉村京子氏、其田良雄氏、大塚和義氏による。

(4) オオウバユリの根は大切な救飢食糧であった。根は掘り出し、搗いて粉にし、餅につき、直径一二センチ、厚さ二・五センチ、重さ一四〇グラムほどの、まんなか穴のあいた円盤型に固めて貯えておく。其田良雄氏「近文アイヌのオオウバユリ *Heed* の採集と調理加工」(市立旭川郷土博物館研究報告第八号)。

(5) 知里真志保氏『分類アイヌ語辞典』第一卷三三二頁。
(6) 知里真志保氏同書一六六頁。
(7) 岡村吉右衛門氏前掲論文一〇二頁。
(8) 大塚和義氏「アイヌの生活文化」『吉田和雄写真集・ユーカラの世界』昭和四十七年読売新聞社刊所収一三七—三四頁。

三 テサゲ 新庄市

山形県新庄市萩野ではアケビ(ミツバ・アケビ)の蔓で「ハキゴ」や「テサゲ」が作られている。「ハキゴ」は背負カゴで、植林や薪炭の生産のとき、山へ昼飯や鉋・鋸などをいれてゆき、「テサゲ」は町へ買物に行くときそのかに使われる。ハキゴには「大ハキゴ」といって、野菜を五、六貫いれても形のくずれない丈夫なカゴがあるほどで、アケビのカゴは軽く、しなやかで使いやすく、また、その美しさから、すぐれた民芸として、これまで幾度か一般に紹介されている。⁽¹⁾

一 かたち

こゝでとりあげたのは、本体が縦二二・五センチ、横二七センチ、奥行一二センチの「テサゲ」である。全体の形は直方体で、口は底よりやや広く楕円形に作られていて、それに幅一二・五センチの手がついている。重さは二六〇グラムで、カサの割には意外に軽い感じを受ける。

胴は太さ一・五ミリのアケビの蔓で編まれ、編み方は立ち涌き編である。タテ相互の間隔はわずか七、ないし、八ミリで、かなり細かく配られている。ヨコは、底廻りのヨコも含めて八段いれてあり、ヨコとヨコとの間隔は約二七

ミリで、ヨコ一筋は、太さ二ミリの蔓の紐二重ねからなり（たゞし、底廻りのヨコは一重ね）、一段ずつ、全体ひとつづきでなく、かけられている。

底は、左右面のタテをヨコの筋とし、そこに前後面のタテを加えて筈目のように編んでいる。底では、左右面のタテは四、ないし、五本ずついっしょにまとめられ、それが五行いれてある。総じて、タテは前後面で五八本、左右面で二七本を数えることができる。

前後面のタテの筋を追ってみると、縁から底へ下ったタテの蔓は、底のタテとなり、底を横切り、左右面のタテをまとめた行の一番外側の行で反転し、再び底を横切り、胴を登りつめ、縁にまで行きついていることがわかる。

縁は太さ一〇ミリで、太さ二・五ミリの蔓を蛇腹巻きにして仕上げてあり、タテはその中に折り込まれているようにみえる。

手は太さ八ミリで、太さ二・五ミリの蔓を二つにして芯にいれ、その上から幅六ミリの細いブドーの皮を巻いて留めている。

二 つくる

材料の「ミツバ・アケビ」は、夏八月から雪の降るまで、山の藪や林の下草のなかから「手でコイでくる」⁽²⁾という。採ったアケビの蔓は葉や芽のついたまま、コダシにいれて背負ってきて、小刀で葉や芽を丁寧⁽²⁾に落とし、すこし乾いたところで曲りを直し、束にし、たとえば仕事場の二階のようなところに伸して干しておく。場所によっては一日で五個分の材料が採集できるとい⁽²⁾う。ハキゴやテサゲに使うアケビは、傾斜地のものは不向きで、平らな場所に育ったものがよく、余り若い蔓はつぶれてしまうので、太く丈夫な蔓を見て選んで採集してくるとい⁽²⁾う。また、雪の時期、一月ぐらい池に浸し、自然に皮がむけるのを待ち、指でこいで外皮を落とし、色の白い蔓を作る⁽²⁾。

ハキゴやテサゲを編むのは冬の仕事である。萩野の聚落は前に水田が広がり、裏手は山に続いているが、曾って

田と炭焼とがこの辺りの主要な生産だったという。

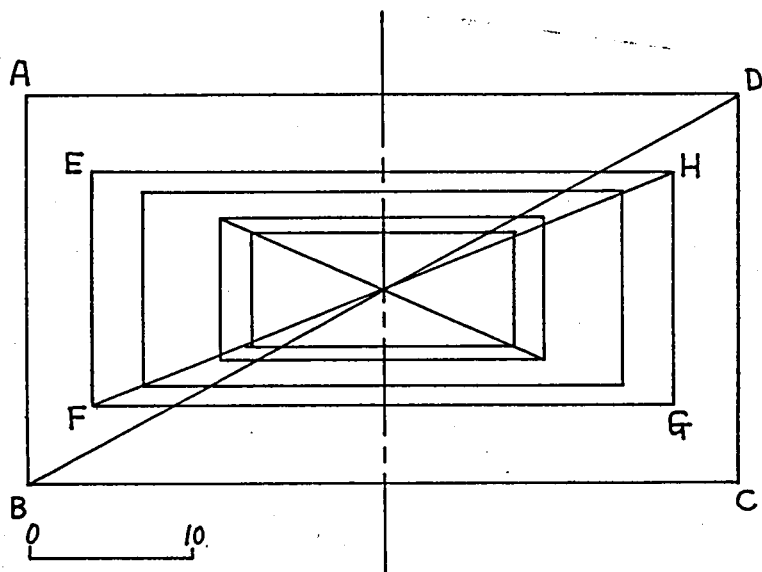
ハキゴやテサゲは、まず底から編みはじめる。底のヨコ、すなわち後に左右面のタテになるはずの蔓を、四本ずつまとめ、脇で一本足して五本にし、前記のように一番端の通りに引つかけるようにして、たがいちがいに掛けてゆく⁽²⁾。これに対しタテの蔓の本数は、予め数えたりせず、底の寸法が予め決っているので「かまわずかけてゆき」、底の中央から、半分ずつまとめて編んでゆくという。タテの長さは底幅に高さを加え、さらに、縁での折り込み部分を見込んだ値であるが、ハキゴの胴の高さは自由だが（場合によって低くも高くも作れるが）、しかし、ヨコより何分か低い程度がよい」といわれている。したがってタテの長さは長いもので約一メートル、小さなテサゲで四〇センチ以上になろう。

底を編みおえると、それを木の板でこしらえた型二枚に挟み、紐でおさえ底廻りのヨコをかける。この腰立ての過程が全体として一番難かしいという⁽²⁾。その加減で全体の形が決ってしまうので、「まがり具合が難しい⁽²⁾」。型の板は、大ハキゴ、小ハキゴ、子供のテサゲ大小、それに最近では脱衣カゴの五種類があり、大ハキゴは三六・五に一五、小ハキゴは三〇に一二、子供のテサゲは一九・五に九、一六・五に七・五センチの寸法に決まっている。これらの型は、「いままであったハキゴから寸法をおこした⁽²⁾」ものだという。

ヨコは、もとは渦巻型で、全体、ひとつづきに編んでいったものだが、「今では一段ずつかけるようになった⁽²⁾」という。またヨコの間隔は目分量で決めるので、必ずしも一定しないとのことである。

縁の組み方は蛇腹巻きで、タテ二本のうちの一本を縁のところで切り、一本だけ残し、残ったタテを「二本隣りへ巻いて出し、端を切る。その上に別の蔓を巻いて仕上げる⁽²⁾」。仕上げるにはブドーの皮を使うともいう。

手はアケビを芯にいれ、それにブドーの皮を巻いたものである。大ハキゴでは、ハキゴの前の面の口の縁にミミを



第三図 ハ キ ゴ の 型

□ABCDは脱衣カゴの底型

□EFGHは大ハキゴ, 以下, 小ハキゴ, 子供の
テサゲ (大, 小)。

対角線をひいてみると, 小ハキゴは大ハキゴをタ
テで $1/5$, ヨコで $1/5.5$ ちよめたことがわかる。

また, 小テサゲは大テサゲをタテで $1/6$, ヨコで
 $1/6.5$ ちよめたことがわかる。

二つつけ、向い側の後の面に負い緒を結び、また、背中 of 当たる後の面の下の縁に長さ一〇センチほどの紐の輪を取りつけ、背負うときには、負い緒をミミヤ下端の紐に通して、一度胸のところで交叉させ、最後に臍の前辺りで結び、負い緒がループ状になるようにして背負う。負い緒は、マダの木の皮を三つ組九打ちにしたもので、太さは八ミリ、長さは一三五センチほどである。

三 その他

なお、こゝではブドーの皮で編んだコダシも作られている。ブドーの皮は、夏七月一〇日から二〇日頃までが採集期で、ブドーは土用にはいると自然に皮が割れ剥げてしまうという。材料のブドーは曲った松の木よりも、まっすぐな山奥の古い杉の木にからみついているもので、太いのは腕の太きほどもあるが、それを鋸で切り、約二メートルの長さにし、その場で小刀で切り口をいれ、幅一〇ミリくらいに手で剥ぎ、外皮と芯の部分捨て、内側の薄い二枚皮だけを採ってくる。⁽²⁾竹と同じように剥ぐのが難しく、「一日剥いでテサゲ一〇個分の皮しか採れないこともある」。

編むときには、一時間ぐらい熱い湯に浸し、柔めてから使う。コダシを編むには、縦三九センチ、横二六センチ、奥行き一一センチの木の枠を使い、底は二つ跳ね二つ潛りの網代編、胴も網代か双子に編み、縁のところでタテを折り曲げ、やはりその上を蛇腹に巻いて仕上っている。⁽²⁾

註

産『(昭和四八年刊) 三一頁

(1) 新庄市教育委員会社会教育課刊『新庄・自然と文化遺

(2) 広野吉助、西田幹夫氏による。

四 カズラ・テゴ 新潟県村上市

「カズラ」という呼び方は、一般に、蔓性の植物の総称として使われている。しかし、こゝでは蔓性の植物のうち

の、とくに、ハマズル、すなわちツツラフジ科アオツツラのことを指す⁽¹⁾。

カズラは海岸の松の幹や枝に絡みつく細い蔓性の植物で、カズラで編んだ「カズラ・テゴ」は「若い人たちが弁当をいれて山へ持っていったり⁽²⁾」、「畑の野菜を取りにゆくとき⁽¹⁾」、あるいは、「町へ買物に出るとき」にも背負ってゆくという。

カズラ・テゴでは、後にも触れるように、ヨコの紐とヨコの紐とのあいだの間隔は、どのカズラ・テゴでも、おむね一定なのだが、この性質によって、この辺りでは、カズラ・テゴの大きさをヨコの間数で数え、たとえば、「買物には六カワ（実際には縦二四センチ、横四七・五センチ・厚さ一二・五センチ）、畑の石取りなどには四カワ（実際には縦一七センチ、横二三センチ、厚さ八センチ）」などといっている⁽¹⁾。カズラ・テゴもまた、その使い途によって寸法、大きさが思い思いに加減できるよう編み方が工夫されているのである。

カズラは、もともと細い蔓状の植物だから、カズラ・テゴを編むには、一度それを干してから使う。干したカズラは一見、折れそうにみうけられるが、しかし、それでいて、実際にはなかなかしなやかで「三年ぐらいいは充分に使える⁽²⁾」といわれている。

カズラ・テゴは、もとは新潟の北部の海岸地方の村々で広く作られていたようである。しかし私たちがこのテゴを探しにいった五年ほど前、それはすでに「七湊というムラでしか作らなくなってしまった⁽²⁾」。なお、粟島では、秋、カツラを採ってきて、男たちが漁の暇をみてはテゴを編み、自分たちで使う、これは海苔摘みや畑の野菜とり、そして弁当いれにし、「口部両端から出ている紐の何れか一つを肩から、後の一つを脇の下から、各々胸に廻して」結んで背負っていたことが⁽³⁾、報告されている。

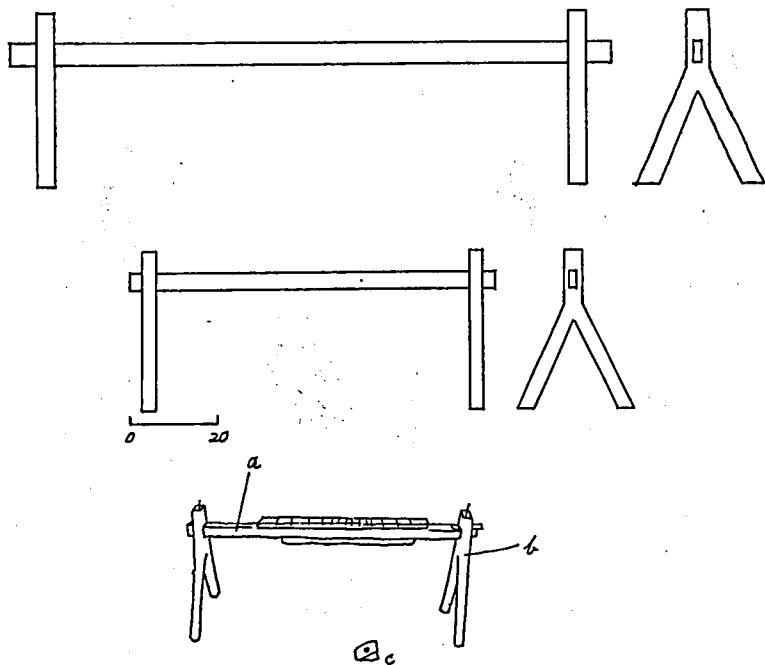
一 かたち

こゝにとりあげたカズラ・テゴは、縦二四センチ、横三五センチ、厚さ一三センチで、全体としての形は直方体状である。たゞし、耐用年限が過ぎたためか、今では、全体としてまるみがつき、口は楕円形状に、いささか広がっている。重さは二八グラムで、見た目よりも余程軽く感じられる。

胴の編み方は双子編、タテはカズラで太さ一・五ミリから二ミリ内外、ヨコは太さ二ミリの紐である。タテのカズラには、ところどころ、葉や枝分れを払ったらしい、節のようなものが残されている。タテはカズラを三本ずつ束ねたもので、それをヨコの紐で絡めてゆく。ヨコとヨコとの間隔は三五ミリで、底廻りの一段も加えると、ヨコは六段にかけられている。タテの行数は、カズラ三本の一束を一行として、胴の前後面では六六行？ 左右面では二四行ほどである。胴の後の面のまんなかには編み留めのための紐かぐりがみられるが、その手法はいたって簡単で、編んできたヨコの紐の端を、その紐の出発点のところに結ぶだけである。

縁の作りは、まず、下から登ってきたタテのカズラを、口の辺りを留めている丈夫な木棉の紐の目に通し、それからゆるやかに反転させ、そのカズラの行から数えて右五ツ目の行にいれ、再び口を留めている木棉の紐の目を通し、そして、口から下へと降りてゆく。カズラ・テゴでは、このように、縁の作りはタテのカズラを組むことの繰り返しによって構成されている。このような縁の作りを竹細工のほうでは「共縁」といつている。

底の編み方は、竹細工的には「箆目」的である。縁から下った前後面のカズラは、底で左右面のカズラのタテと絡みあい、一ツ跳ね一ツ潛りの要領で組合される。そのとき、カズラは、前後面では二行（六本）ずつ、左右面では六行（一八本）ずつ束ねられ、組合されてゆく。左右面のタテはちょうど底のまんなかで重ね合される。前後面のタテの末端の処理にも面白い手法がみられるが、こゝでは製作的にこの手法を確認してないので、これ以上は触れない。



第四図 コモアシ（新潟県村上市）

上は 俵を編むときに使うコモアシ
 中・下は カツラテゴを編むときに使うコモアシ
 （aはヨコギ，bはコモアシ，cはコモズチ）。

負い緒は太さ八ミリ、長さ八〇センチ、三つ組丸打ちで、先へゆくほど細くなるよう綯ってある。テゴへの取りつけは、この負い緒を三本用意しておき、最初の一本をテゴの前側面の縁に結びつけ、三ヶ所の結びで二ツの目を作るようにし、残りの二本はおのおのその端をテゴの後側の面の縁に結びつけ、先をさきほどの前側面の目に通し、口を前後から閉じるようにして結ぶ。しかし、この標本の負い緒では、手に提げたり、腰につけたりするには差しつかえないけれども、背負うとなるとこの紐の長さではすこし足りないように思われるので、その点、実際にはどのようにしたのであるか。

二 つくる

カズラを採ってくるのは岩船神社の秋祭ののち、ちょうど葉が枯れ落ちる一〇月頃である。採ったカズラは砂浜の砂の上にならべて干し、使うとき、たいいてい風呂の上り湯のぬるめのお湯に浸して、もどして使うという。⁽²⁾

カズラ・テゴを編むのには、お湯に浸して柔かくしたカズラを、こゝでは「ウマ」という、ちょうど炭俵を編むときに使うのと同じ形の台にのせて編んでゆく。カズラ・テゴのウマは幅八五センチ、高さ三七センチ、奥行き二七センチ（たゞし人の字形の柱の足の幅）で、「コモアシは栗、ヨコギ（横木）は松、コモズチは桜か梨が好適」だといわれている。炭俵を編むウマは幅一三九センチ、奥行き三三・五センチなので、カズラ・テゴのウマは俵編みのウマよりひとまわり小さいことがわかる。ウマの横木の上には、テゴのヨコの間隔に、三五ミリごとに窪みが刻みこまれている、そこにヨコの紐をかけ、その先にコモズチを下げるのである。このクラスのカズラ・テゴでは、タテの長さは四三センチで、途中で随時カズラをさし加え、S字型にたわめながら胴の部分を編んでゆく。そのやり方は「俵の編み方と何等変らない」。⁽²⁾ なお、タテの長さ四三センチは、テゴの高さ二三センチに、底で折り曲げる部分の長さ二〇センチを見込んだ値である。

縁の編み方は、この辺りで「グミ」と呼ばれる型である。「グミ」は三つ組のこと、改めて標本に当たてみると、あるタテの一つの行のカズラ三本は、いっしょになって隣りの行を飛び越し、一行おいて次の行に入るタテの下を潜り、そして、もう一度他の行を飛びこえているので、やはり三つ組であることが確められる。

胴を編んでしまうと、編みはじめ、編みおわりの端同志を綴じ合せ「最後に底をつける」。

三 その他

村上から上海府、下海府にかけて、越後の北部の日本海岸の地帯では、テゴを「スゲ、ガマ、アケビ、ワラなどで編む。とくにそのうちでもワラを使うことが多い」という。⁽¹⁾このような状況のなかでは、たとえば、アケビのテゴにワラのテゴの作り方が応用されたり、逆に、アケビのテゴの形がワラのテゴに応用されるといった、用具同志の形や作り方の上での交流が絶えずなされていたかもしれない。カズラ・テゴは、してみると、俵編みの手法がカズラという素材と結びついて生まれたという印象が強いといえよう。たゞし、ウマを使った俵編の手法そのものは、その分布からいって、ワラ細工の成立よりも、いっそう古い層に属することが想定できるので、にわかには断定することは難しい。

註

(1) 齊藤誠一先生による。

(2) 齊藤誠一先生、そのほかの方々による。

(3) アチック・ミューゼウム編『民具問答集』(昭和二年アチック・ミューゼウム刊) 一七・一七三頁。協田政五郎氏の報告による。

五 ショイ・ズカリ 秩父吉田町

関東山脈の東側の地域、埼玉県や群馬県の山ぞいの地帯では、「ショイ・ズカリ」⁽¹⁾ また「イジコ」といって、イワスゲという草で編んだ平らな背負い袋が、かつて、一般的に使われていた。

編み袋の諸形態、用具論的に(中村)

奥秩父では、ショイ・ズカリのなかに、お弁当をいれ、また、材木の伐採に使う鋸の鑢や矢（楔）などいれ、山仕事に背負っていった。⁽²⁾ そうした山仕事の弁当は、俗に二合とか二合半の大きなメンバ（こゝではもっぱら楕円体型の檜の曲物）にいれ、香コや豆の煮付けたものをおかずにしたという。だから、メンバから、塩気が浸み出すが、イワスゲのショイズカリは、たとえ塩気が浸み込んでも決して「解けない（ほころびない）」⁽²⁾、背負う紐の方が五年、麻紐でも三年しかもたないのに、ショイ・ズカリの本体は「たつぷり一〇年はもつ⁽²⁾」という。そうした強靱なショイ・ズカリはどのような構造と成り立ちをもつのだろうか。

一 かたち

ショイ・ズカリには、二つの型がある。一つは双子に編んだもの、もう一つは網代に編んだものである。ここでは、とりあえず双子型のショイ・ズカリについて調べてみよう。

こゝにあげたショイ・ズカリは、縦三六センチ、横三二センチ、厚さ一八ミリ、重さ三二〇グラムで、全体としての形はほぼ正方形である。図版の資料では旧所用地は群馬県となっているが、詳細は明らかでない。

タテ、ヨコは、両方とも太さ二ミリの紐で、タテは一本一筋、タテとタテとの間隔は四ミリ、これに対して、ヨコ同志の間隔は約一一ミリで、胴には四帯、飾りの間がみられる。タテとヨコとの密度が極めて高く、このショイ・ズカリ、あるいはショイ・ズカリ一般に、全体から受ける感じは、そのため非常に繊細である。試みに、タテの本数を数えてみると、裏表も一五六列で、この一五六行が三二センチの間におさめられているわけである。なお、飾りの間では、この間の上下の段のヨコは二本ずつ密着させてヨコを強化しており、四帯のうち三帯（偶数では筋が通らないので）に、タテを交叉させてX字型に編んだ文様が編込まれている。このように、それとなく細かい文様を編み出すことができるのが、ショイ・ズカリの一つの特徴といえることができる。

いま、あるタテの紐を辿ってみると、底から口へと登りつめたタテの紐は、緑のところではヨコ二本の紐の目を潜り抜け、反転して次の列のタテの紐に移行してゆくことがわかる。このように、ショイ・ズカリの紐配りもまた、タテは結局、全体として、ひとつづきの一本の紐から構成されているのである。

縁のうえに出たタテ（タテの目）は、そのなかに太さ二五ミリの紐を通し、口を綴じるようにしてある。口を綴じるには、二五ミリの紐でタテの紐の目を三つずつまとめてから、二五ミリの紐を引くと口が閉じるように工夫されている。

負い緒は太さ二五ミリの紐を八本束ねたもので、口を閉じた紐のあいだへ通し、両端はショイ・ズカリの本体の内で結んで留める。こうした負い緒の形・かけ方もショイ・ズカリ特有の手法ということが出来る。

ショイ・ズカリでは、タテと同じように、ヨコも全体としてひとつづきの紐で編んであるらしい。しかし、それは作りの過程で確めよう。

二 つくる

イワスゲは「岩山の沢のような場所、水で岩が湿りをおびているようなところに繁る⁽³⁾」という。高さは六〇センチ前後で、そのうちショイ・ズカリのために使うのは「穂の出はじめたもの⁽³⁾」で、「土用頃、根にカネがつく頃（土用頃根元から五センチぐらいの高さのところまで紫色に色づくという、これをカネが着くといっている）、新芽を抜いてくる。ショイ・ズカリ一つ作るのに、直径七センチほどのたば⁽³⁾を一〇シバリ（一〇束）か一一シバリ使う⁽³⁾」。一〇束採るのに、たっぶり半日はかゝるといふ。

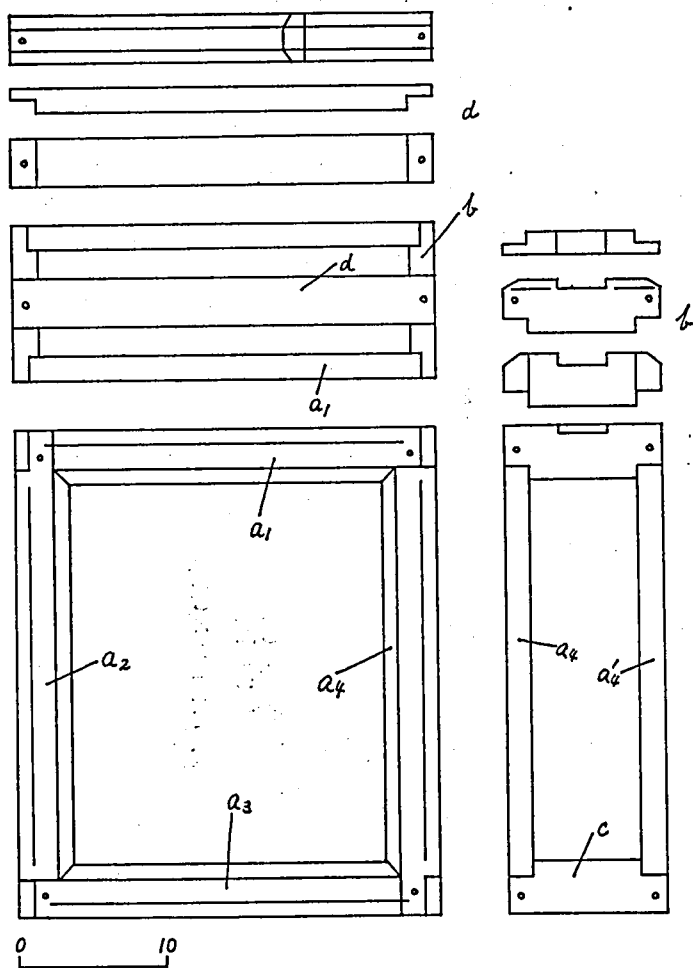
採集したイワスゲは、翌日天気を見て、煮えたぎったお湯にいれて茹で、「一枚一枚、葉が重なり合わないように土の上に散らして」一日のうちに干しあげる。この一日のうちに干しあげるといのがきれいなイワスゲを作るコツ

で、白く上げるには一日で干しあげ、二日に涉ると、もう葉の色がくすんでくるといふ。しかし土用の頃、この仕事はなかなか難かしく、「朝天気でも、夕立がくればもうだめ」である、葉の色はくすでしまう。この辺りでは、地形に応じて主屋のまえには、できるだけ広いニワが確保されている。そのニワの土に、じかにイワスゲを一面にひろげて干す。干しあがると、後はためておき、お百姓仕事、山仕事の間合をみて、編みにかゝる。

ショイ・ズカリは、一日編み通して、一つ編むのに三日はかゝるといふ。編みの繊細さとそうした日数とは裏腹なのである。

ショイ・ズカリを編むには、まず、縄だけまとめて縛っておく。葉のまんなかの芯の固い箇所は予め取り除いておき、柔い部分だけで縛ってゆく。二合のメンバをいれるショイ・ズカリなら、タテの紐だけで約九〇尋、全体で二七〇尋用意しておかねばならない。炉のある板の間に胡坐をかい、身体を前かゝみにして、右足の指で紐の端をおさえ、左手を下、右手を上にして、右手を向う側に突き出す要領で縛い、「指の腹で引けばなじむ」(擦りがかゝる?)という。紐は太さ一・五ミリで、ふとめのものなら二本、細めのものなら四本ずつ縛合せて紐にする。紐の出来の良し悪しがショイ・ズカリの出来はえを左右する、たとえば、編みが如何にうまくとも、紐の作りが出来では、完成したショイ・ズカリは、どことなく、決ってこないものだといふ。

編みには「ワク」(枠)を利用する。「ショイ・ズカリの大きさはワクの大きさで規定される。大きいショイ・ズカリを作るには大きなワクが必要だ」。(3)ワクの寸法、大きさにはこれというきまりはなく、それぞれ「自分で自分の持つてゆくメンバの大きさに合せて作る」。(3)そこで、めいめい、ショイ・ズカリの編みやすいように、ワクを工夫して作る。たゞし第五図のワクはやゝ凝ったもので、縦三〇・五センチ、横二五・七センチ、厚さ九・五センチ、柱・横木・梁など一三の部分品で組立てられ、丁寧に相欠けつぎで接合されているが、一般には、もうすこし簡単な、たと



第五図 ショイ・ズカリの枠（埼玉県秩父郡吉田町）

a₁, a₃ 横木, *a₂, a₄* 柱, *b* 梁, *d* カヤを張るための板
a は 相欠けつぎで、繩がかりよいよう面がとってある。

えば四つの木を口の字型に組合せたワクなどが使われていたようである。

ワクを組立てると、これにタテの紐を、ほとんど透間なく、左下の隔からかけはじめてゆく。このとき、ワクの梁の上面に、横に萱を一本渡しておき、下から登ってきたタテの紐をこの萱に絡ませ、萱をくぐらせてから反転させ、以下同様に、下から上へ、そして上から下へ、下へ降りたら反対側の面へ出し、また、下から上へ、梁の萱で反転して上から下への順で廻してゆく。

これに対してヨコ紐は、「ヨリツチ」といって、タテの紐を挟むようにして双子でかがってゆく。胴の三分の二ほど編みあがったところで、「ヤマミチ」(山道)といって、タテの紐にヨコを山型に、あるいは、波型にかけてゆく。これは意匠のためばかりでなく、「タテを散らさないのと、飾りのため」⁽³⁾との両方の効用があるという。最後にヨコの紐の端を疣結びに止め、梁の上の萱を切り落すと、ショイ・ズカリの本体が出来上る。この梁の萱にかゝっていたところがタテの紐の口かぶりの紐を通す目の部分として残るわけである。従って、ショイ・ズカリの双子では、タテはタテで一本、それに別の紐をヨコにしてからげてく。「ヨコは道中が長いので、途中で縄を綯い足しながら」、渦巻状に巻上げてゆく。その際、「ヨコとヨコとの間隔は目分量で決める」。「タテは、幾分、ゆるめに巻いておき」、ヨコはその緩いタテの紐を締めながら編んでゆく、いや綯ってゆく。だから「ヨコになつてからが手間をくう」⁽³⁾のだという。

ところが、網代のショイ・ズカリでは、双子のショイ・ズカリとは、すこし様子が違っている。網代のショイ・ズカリでは、タテもヨコもひとつづきの一筋の紐で編んでゆく。網代のタテは、そのままヨコに転化してしまう。そして、竹の籠の網代編そのまゝに二つ跳ね二つ潜りの型で編んでゆき、胴三分の二ほど編んだところで、今度は、双子編で収束させるらしいのである。

「ヒモ」、すなわち負い緒は、細い紐を五本ないし七本束ね、途中で三ッ組や石畳といった編み方で変化させ、ショイ・ズカリの底部内側に通し、そこで両端を結ぶが、負い緒の作りには、ヒモが肩からずり落ちないような縄配りがなされている。

三 その他

このように、ショイ・ズカリでは、ワクの力を借りるほか、ほとんど一切手だけで作られる。たゞし「ヨコをかける」ときは、竹の篋を使って一本一本締めつけてゆく、そうでないとザレる（タテの紐に遊びが出る）ことがある⁽³⁾。そして、目の詰った網代のショイ・ズカリは、米粒どころか、細かい「粟粒さえ、こぼさない⁽³⁾」。この目の極度に詰ったショイ・ズカリが昔は技術の見せどころだったようである。ショイ・ズカリの繊細な、鋭い感じは、実はそのような技術傾向なり雰囲気から形作られたのではなからうか。

註

(1) 岡部真木子氏「背負袋」(『アルプ』一四一号所載)。

(2) 山中芳男、山中雅文・小林茂氏による。昔は山仕事でお弁当を持って通うのは「村からせいぜい一里ぐらい離

れた所まで」で、それ以上の所は飯場を建てて材木の伐出しなどをした。

(3) 大畑寅寿氏・山中雅文氏による。

六 ショイ・ネコ 伊那宮田村

「ショイ・ネコ」は、背負い「ネコ」のこと、この場合の「ネコ」は、敷物のネコのことかと思われる。ショイ・ネコは、ワラの敷物のネコを二つに折った平らな背負い袋で、現在のナップ・ザックのように麻の紐などつけ、山仕事道具、たとえば、「弁当や鉈や背負い縄などいれて背負ってゆく⁽¹⁾」。そして、帰りにはショイネコを背中当てにして、「粗朶など背負ってくる⁽¹⁾」という。ワラをネコ編みした背中当ての形式は東北から、北陸、中部、関東にまで

広がっている。

一 かたち

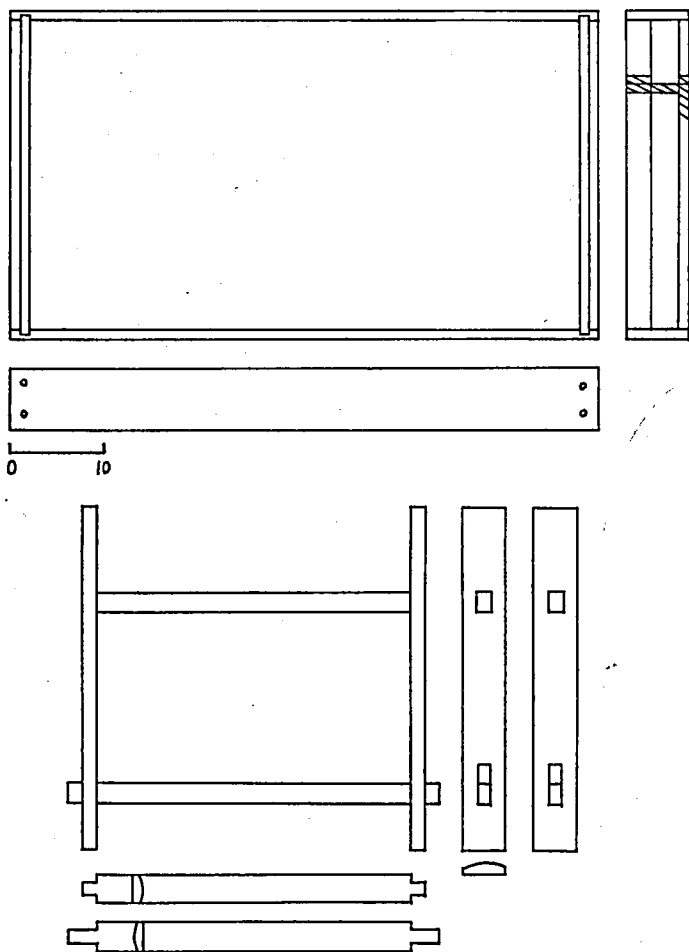
ショイ・ネコは、おむね縦五〇センチ、横四三センチ、厚さは四センチで、編み袋のなかでもショイ・ネコに比べて縦なのである。また、全体の形は極めて平面的で、底らしい底がないのが第一の特徴である。この寸法は男の人なら背中全体、ちょうど腰のところまで覆うくらいの大きさである。このようなショイ・ネコの形は胴の編み方、ネコの綴じ方に関係していると思われる。重さは一・六キロで、背負い袋の仲間では、きわだった重さである。これもまた編み方と関係があると考えられる。

胴の編み方は、私たちのいうネコ編みである。ネコ編みは基本的には双子的であるが、双子が、どちらかというと、タテが密で、ヨコが疎だったのに対し、ネコの方は、タテが疎で、ヨコにはそれ分幅の広い材料が使われる。そして、ネコでは、タテの掛け具合から美しい矢羽根文様が全面を覆うのである。

このネコでは、タテには幅一〇ミリのワラ、ヨコには太さ五ミリのワラの縄が使われている。ヨコは、外からはみえないが、二〇ミリ間隔でいれてあり、タテの矢羽根一本の幅は二〇ミリ弱で、編み留め部分の最後の七センチは、とくに、タテに太さ六ミリの縄がいれてある。タテの上下縁にはネコ特有の返しが見られる。前後面とも、厚さは一五、六ミリにも及んでいる。

このネコでは、後の面にタテに幅一〇ミリくらいボロ切れが織込まれている。よくみると、ボロ切れには、白い切れ、紺や茶の切れ、縞の端、それに刺し子の切れなどが含まれていて、これらの切れが、たぶん編む人によって長いあいだかかって、丹念にあつめられたものらしいことが想像できる。

底は、太さ五ミリのワラの紐で、タテ二筋目ごとにかがって、前と後の両面を縫い合せただけのものである。



第六図 ショイネコの枠（長野県上伊那郡宮田村）

上は モロブタ（たゞし内側に竹の簀の子が張ってある）

下は 組立て式の枠

負い緒は、太さ七ミリの三つ組丸打ちの麻紐で、両端はネコの後面左右両下隅から内側へいれ、玉結びにして留めである。負い緒のつけ方も、このようにはなはだ無造作である。

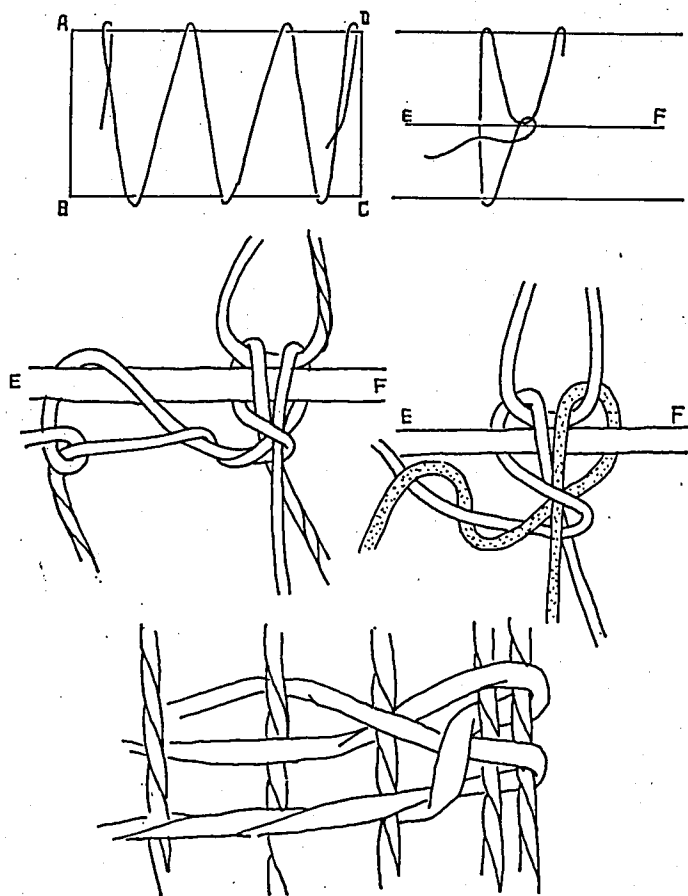
二 つくる

ショイ・ネコの編み方は敷物のネコの編み方を移したものだと思われる。たゞし、敷物のネコでは、壁いっぱいに広がった、大きな木のワク（梓）を使うのに対して、このショイ・ネコでは、ワクのかわりに長さ六〇センチ、幅三五センチ、深さ七センチほどのモロブタが使われる。モロブタは「鹽飴を茹でるとき、お供えを搗くとき、出来たての鹽飴やお供をならべる」器で、なかに竹の簀の子をいれて使うのだが、もとは「酒屋や醬油屋で、桃花をつけ、乾すのに使った」⁽¹⁾という。

ショイ・ネコを編むには、まず、モロブタの短い辺に平行に、ヨコの紐を二二回、ないし二三回巻きつ、それにタテのワラをはさんでゆく。

ヨコ紐をかけはじめるとき、ショイ・ネコ自体が後で取りやすいよう、モロブタの下に木のクサビをいれておく。

ヨコの掛けはじめ・掛けじまいは、ヨコの紐の端を同じヨコの紐の目に挟んで留める。これは何気ない手法であるが、敷物のネコでは、梓の長辺と平行に、水平に竹を当て、ヨコの紐をこの竹にかけてゆき、その掛けはじめ、掛けおさめはもつと複雑である。そして、ヨコの紐配りは、敷物のネコでは竹を中心に、ちょうど断面Cの字型に掛けるが、ショイ・ネコでは、梓に螺旋型に廻してゆくのである。こうした敷物のネコとショイ・ネコとの編み方の違いは、敷物のネコが端の綴じ目を厚く編まねばならないのに対し、ショイ・ネコではそうした必要がないことに対応していると思われる。「ショイ・ネコの編み方は、⁽¹⁾（敷物の）ネコとちつとも変らないが、（ヨコの紐の廻し方は）輪でゆく。縫い合せが厚くなるとこまるから」。



第七図 ショイ・ネコの縄配り

上左は ショイ・ネコの縄配り，上右は敷物のネコの場合
EFは竹。

中は 二つとも敷物のネコの編みはじめ。

下は ネコの端の縄配り（返し）。

ヨコのワラ紐は叩きワラで綯う。だから「切れるということは、よっぱどのことでもないかぎり、まあない」⁽¹⁾。

ヨコを張りおえると、ヨコにタテのワラを二本ずつ双子にかぶってゆく。このときの縁のタテの折り返しは第七図のようである。敷物のネコでもショイ・ネコでも、タテをヨコに通すとき、莫座のように梭を使わず、もっぱら手だけで、指先でタテの目を締めながら通してゆく。そのときの様子が、いかにも猫が爪で何かを搔くのに似ているので、「ネコに限って織るとはいわない。ネコは搔くという」⁽¹⁾。

負い緒は三つ組で、丸打ちにする場合と平打ちに編む場合とがある⁽¹⁾。

ショイ・ネコ一つ作るには半日かゝる。こゝでは「ショイ・ネコは半工」⁽¹⁾という。しかし、専門にショイ・ネコを編む人たちのなかには、ワクにモロブタなど使わずに、敷物のネコの枠をそのまま小さくした、組立て式の枠をこしらえて、使っている人もある。その一例を第七図に示しておこう。

三 その他

敷物の「ネコでは（ヨコの間隔は）一寸五分で、長さは二間、幅は六尺。部屋の広さによって、幅は五尺のことと、四尺のことがある」⁽¹⁾。同じワラの敷物でも「ムシロは長さ六尺ないし一二尺で、幅は三尺に統一されている」⁽¹⁾。在来の敷物としてのネコと違いムシロははやくから規格化されていたわけである。また、構造もムシロとネコではやゝ異なる。「ムシロはタテが二本、ヨコが一本なのに、ネコはタテが一本、ヨコが二本」⁽¹⁾で、ムシロのほうが正規の双子編である。たゞし、私たちのいい方に従えば、「ネコはヨコが一本、タテが二本」ということになる。しかし、同じ双子でも双子を編む過程からみれば、この二つの敷物は別系列である。敷物のネコは、枠を家の「土間の柱にたてかけ、二人して搔いてゆく」⁽¹⁾。「敷物のネコは、編みあがると、水平な竹のちょうど下のところで、タテの紐（私たちのいうヨコの紐）を切り、本留かムシロ留にしてとめる。ショイ・ネコは竹などいれないから、こうした手間はかゝらず、

ずっと簡単だ⁽¹⁾。これに対して、ムシロはムシロ機を使い、箒や校の助けを借りて「織ってゆく」。大正四年、城倉氏が新しく調えたムシロ・バタは、総高二二・五センチ、横幅一六五センチ、幅二九センチ、奥行き四二・五センチで、木の丈夫な台の上に、幅九センチ、厚さ三センチの柱をたて、柱のあいだに長さ一六五センチ、幅一〇センチ、厚さ五センチの横木を二本渡し、柱には横木の高さを調節するためのクサビ穴が三つほどあけてある。このように道具一つみても、ムシロは機械的だし、ネコは、はるかに素朴である。敷物のネコの技術がショイ・ネコに応用された根拠の一ツは、このような編み方のたやすさ、素朴さにあつたのだと思われる。

註

(1) 城倉国雄氏、向山雅重先生による。

(2) ネコ編みの背中当ては、梯子などを利用して編む。一丈ほどの長さのワラ縄を五本用意しておき、その縄を途中で二つに折り、梯子を立てかけておいて、縄の端を梯子の棧に結びつけ、曲り目を下にして垂しておく。縄の

曲り目を別のワラで三ツ組し、タテにヨコをかけてゆくのである(吉田三郎氏『男鹿寒風山麓農民日録』、アチックミューゼウム昭和十三年刊、三三九—三二頁)。ネコ編みの背中当ては秩父皆野町小林惣英先生のコレクションのなかにもみえる。

七 ガマ・コシゴ 広島県八鉾村

俵編みの型の編み袋で、こゝでは是非とも触れておかねばならないのは、すでに報告のある、中国地方その他のガマコシゴのことである。ガマ・コシゴもまた、「山仕事、畑仕事に行くとき弁当をいれ、木を樵り、柴を刈りに出かけるときにはそれぞれの道具をいれる。山鋸、マサキリ、鎌等をいれる。山での採集物(茸、蕨、栗、木の葉)もいれる」⁽¹⁾、そのほか町へ買物に行くときにも背負ってゆくという。

ガマ・コシゴでは、タテの幅が極めて広く、全体としておろかな感じを受ける。その点、他の編み袋とは、外観

的にやゝ趣きが異なるように思われる。

一 かたち

実例によれば、縦は三五センチ、横三八センチ、奥行一〇センチ、重さ五四八グラムで形は全体として直方体的である。

タテはガマで、幅一〇ミリ、ヨコは太さ三ミリの細い紐である。縁の部分を注意してみると、タテは縁のところできり返されていて、そのきり返しのなかに太さ九ミリの紐が芯になっていることがわかる。なおこの芯の紐は胴の編み留めの役目も果たし、底にまで到達している。

タテは、前後面で三九本ずつ、左右面では九本（あるいは一〇本）である。

ヨコは太さ一・五ミリの紐を二本縫合せたもので、ヨコとヨコとの間隔は約五センチで、下の一段のみ、底廻りのヨコがいてある加減か、やゝ狭くなっている。

底には、まんなかにヨコが一本いれてあり、そのヨコから三センチの間隔で一本ずつ、さらに二センチの間隔で底廻りのヨコがいてある。中心のヨコ紐と、左右のヨコ紐とは、それぞれ端を底廻りのヨコに結びつけて留めてある。中心のヨコには前後面のタテが集まり、そこで前面のタテと後面のタテとは交錯し、中心のヨコの目を潜り、底内側に折込まれ、その上に左右面のタテの端が重ねられている。

前の面の上から二段目のヨコ、後面の縁、それに底の中心のヨコの三ヶ所には負い緒を通すためのミミがつけられているが、ミミは一本の紐を二つに折って、それを堅く縫合せたもので、外見は四つ組のようにみえる。

二 つくる

ガマは一月中頃刈り取り、洗って蔭干ししておく。ヨコの紐は山柿の木の皮で、「八月頃、樹の皮のよく剥ける

ときに山でヤマガキの皮を剥ぎ、これを泥田のなかに埋めて、一二月、一月、寒くなつてからとり出して洗うと、薄く幾枚にもバラバラに剥げるようになる。それを干して縋⁽¹⁾うのだという。

ガマ・コシゴを編むには、この辺りで「ゴモガセ」という、俵編みが使われる。ヨコをゴモガセにかけ、タテの「ガマをおいては交互に編む」⁽¹⁾。「最後に始めと終りの編み口を結ぶ」⁽¹⁾。底は、あとで「手にて編み込む」⁽¹⁾という。ゴモガセは人の字型の木に横木を渡したもので、紐巻き（鍾）が五本下っている。このような様子からみて、ガマ・コシゴに使うガマの長さは約九〇センチほどと思われる。

ガマ・コシゴは、一つ作るのに「充分にみて約二〇時間」、負い緒一組作るのに「充分にみて三時間位かゝる」⁽¹⁾という。初冬とはいえ、泥田のなかでの作業は決して容易なことではなかったはずである。

註

(1) アチック・ミューゼウム編『民具問答集』（アチック・

ミューゼウム刊）三〇二—四頁、磯貝勇先生の御報告による。

八 テゴ 阿蘇南麓

熊本、鹿児島、宮崎三県にまたがる代表的な編み袋としては、オオツヅラフジで編んだ「ツヅラ・カガイ」をあげることができる。オオツヅラは「この地方の山に自生していて、その地上を這っている茎の数メートルのものを一〇月頃とつてきて陰干しにして貯えて」⁽¹⁾「おき、編むときには水に一晩つけて、柔かくして編むが、⁽¹⁾編むときにはカガイカタという四角な枠を使うことが、すでに、報告されている。

しかし、南九州には、阿蘇の南の地帯から宮崎の米良、諸塚にかけ、平らで目の極めて細かい独特の編み袋が使われている。その編み方は注目すべきものである。

一 かたち

標本によれば、「テゴ」は、縦三五センチ、横三三センチ、厚さ一五ミリで、全体の形はほぼ正方形である。重さは五一〇グラムで、編み方は双子、または、立ち涌き編である。

タテは太さ約二五ミリで、きつく編んであり、タテとタテとの間隔はわずか五ミリである。ヨコは幅四ミリで、シヨイ・ネコのヨコのように透間なく配線されている。タテは約六〇行、ヨコもまた六〇本で、それがわずか三〇センチ四方のところに配られているのである。

タテは最上段のヨコの目を抜け、縁にそって曲り、一本おいた左隣のタテの左脇から外へ出、五ミリほど出たところで切揃えられている。

ヨコの紐は、底の左隅から渦巻型に、ひとつづきで最上段まで登りつめる。テゴによっては、途中で太さ一・五ミリの紐二本を編った紐三筋をいれ、縞文様を作り出している。

口・胴・底のまわりには、外枠に、太さ三ミリの四つ組丸打ちの紐がそえてある。このような縁取りの手法もまた、他の編み袋にはみない手法である。

負い緒は幅二五ミリの平打ちの带状のもの、または丸打ちで、テゴの縁廻りの紐を本体に結びつけている細い紐の目に、絡んで留めている。

二 つくる

阿蘇馬見原で伺ったところによれば、この辺りから宮崎県の諸塚町にかけて、テゴには、「スゲ・テゴ」と「カク・テゴ」との二つの型が行われているという。⁽²⁾スゲ・テゴは、前記のような平らなテゴで、長さ三〇センチ、太さ一五ミリほどの竹をタテ二つに割っておき、そのあいだへテゴのタテ紐を透間なく挟み、紐の口になる方は、からみ合う

といけないのでひとまず結んでおき、竹の方から（テゴの底の方から）、順次、ヨコを双子にかけてゆくという。⁽²⁾カク・テゴは四角な・直方体状のテゴで、杉の板で縦二尺、横二尺、奥行き五寸の枠をこしらえておき、それに左上からタテの紐をかけはじめ、全体かけおわると結んで留めておき、それにヨコを双子にかけ、底から胴へと編んでゆき、編みおわると、枠の上板のまんなかでタテ紐を切り、口を開け、共縁で縁を綴じるのだという。⁽³⁾負い緒は、ここでは三つ組でリユックと同じように、手を通して肩に背負えるようにつける。

材料はタテ、ヨコとも「スゲ」で、春先き若芽が出てからが採り時分で、一本一本手で抜いてきて、雨にあたらないよう、一束ずつ束ね、屋内に下げて干し、「枯らしてしまふ」⁽²⁾という。スゲは熊本県側にはみあたらず、峠を越えて宮崎県側から採ってくる。⁽²⁾諸塚辺りでは株を山からとってきて、屋敷の近くに植えておく人もあるという。

紐は、ワラの縄と同じように右廻いで、太さ五ミリ前後に廻っておき、テゴ一つは「縄廻い二日、編むのは一日」でできるという。⁽³⁾スゲ・ナワは、この辺りでは「カケ・ナワ」といって、昔は萱葺屋根の屋根葺きになくてならないものだったという。⁽²⁾

テゴは、昔、伐採や薪炭作りに山へ働きにゆくとき、弁当や鋸・チヨナ・鉈・お茶などいれて背負っていったが、宮崎県側から便利な「カルイ」という竹籠がはいり、また、リユックが一般化して、誰も使わなくなってしまうという。⁽²⁾弁当は竹の曲物の「メンバ」で身と蓋両方につめ、昼の分とオヤツの分と四合ぐらいづつもってゆく。

テゴは、昔はたいがい、諸塚辺りでは自分で編んで自分で使ったもの。⁽²⁾しじゅう家の年寄りが作っているのを見ているので、「難かしいところはない、誰でもできる」⁽²⁾、スゲ・ナワ廻いは慣れているからだという。

そうしてみると、九州山系のテゴについても、前出サラニップのような編み方や関東山系のショイ・ズカリ的な編み方が行われていたことが確められよう。なお、スゲの調整、テゴの編み方についての一層詳しい調査が望まれる。

註

(1) 小野重朗氏『南九州の民具』(慶友社昭和四四年刊)二

四九頁。

(2)

中矢富吉氏による。沢武人先生・泉房子先生によれば、宮崎県総合博物館収集の東米良その他の資料のなかにも、この種の編み袋がみられる。

九 アンツク 石垣島

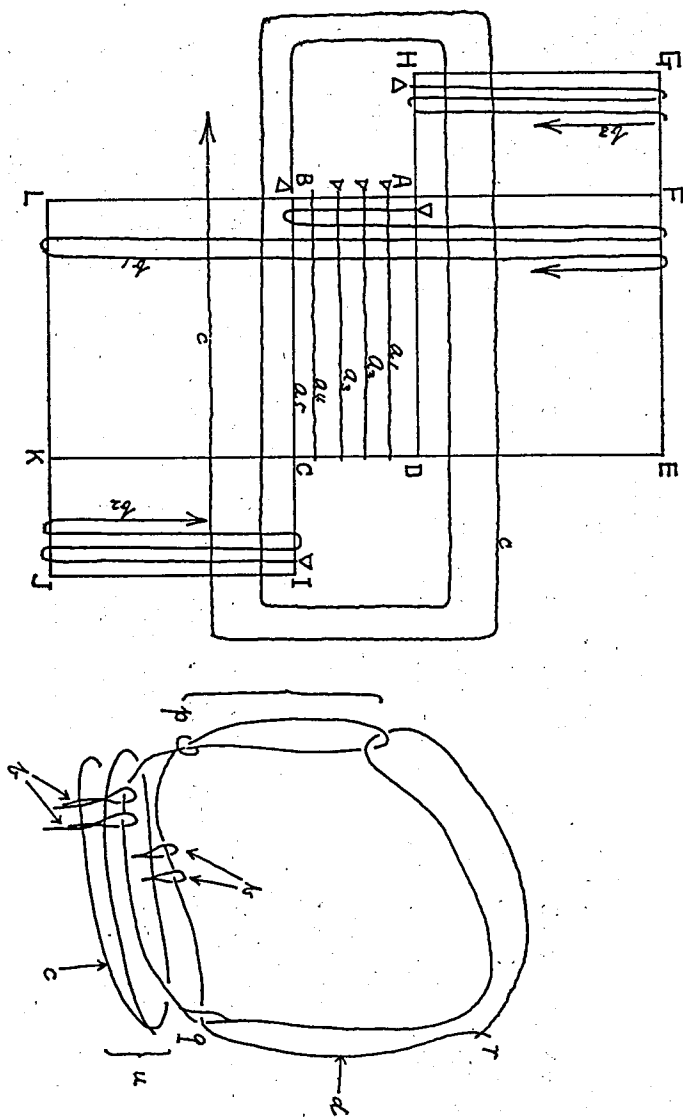
早川孝太郎氏の報告によれば、アンツクは「藁をもつて製する一種の採取用具で、コダシと同じように用いる」⁽¹⁾アンツクには「形にも、たて長のもの、横広がりのもの、丸形のものがあり、用途も畑用、海用、山用などが」あり、「イモ掘りに使うような大きいものから弁当入れにする小さいものまである」⁽²⁾という。アンツクを編むのに使う繩は「藁繩もあるが弱いので、主にアダナシ繩(アダンの繊維)でつくる。マーニ(黒つぐ)の繊維である黒皮を用いて作ることもある。あるいは、その葉を枯らして繩を編んで作ることもあるが、この方は少ない」といわれている。

アンツクは南島を代表する民芸品として各地で売られているが、たしかに「その鄙びた中にも形や編み方に一種の洗練されたところがあり、旅行者や都市生活者に好まれるのであるらしい」⁽²⁾。

一 かたち

私たちのアンツクも民芸品として売っていたもので、縦一九センチ、横二〇・五センチ、奥行き九・五センチ、重さ一四四グラムで、全体としての形はきちつとした直方体型である。

このアンツクは、タテもヨコも太さ三ミリの紐で構成され、ヨコでタテを二本ずつ束ねるようにして双子編みされている。タテの本数は、前後面で二六筋、左右面で一二筋で、ヨコは間隔一八ミリで、底廻りのヨコをも含め、全部で九段かけられている。ヨコ九段のうち、最上段は、いわば縁留めで、ヨコ三本を透間なくかけ廻し、帯状にして縁



第八図 アニックの縄配り

ABCDは底, FGHA, IJKCは左右面,
aは底のヨコ, bはタテ。uはくちかぶり。

を強化している。アンツクの几帳面さは、材料のアダンの繊維の堅さにもよるが、また、こうした縁の丈夫な作りにも一つの理由がある。

胴を形作る双子のヨコは、辿ってみると全部ひとつづきで、底廻りから右廻りの渦巻型で、縁まで登りつくことが確かめられる。タテはというと、これもまた一本の紐で、ちょうど関東山系のショイ・ズカリのように、たとえば前面の左下隅から出発し、縁まで登り、前記の縁のヨコ三本の帯を抜け、縁のところで反転し、再びヨコ三本の帯を抜け、底まで下り、底のタテとなり、今度は後面のタテとなり、以下同様にして胴と底とを廻っていることがわかる。

これに対して、左右面のタテの紐は、左側の左下隅から出発し、縁まで登り、ヨコ三本の帯を抜け、縁で反転し、下降し、底の端のタテ紐に絡まり、再び上昇し、今度は底へ降りたところで断ち切られている。したがって、左右面のタテ一二行は、六本の紐で出来ていることになる。左右面のタテの端は、一本一本、底廻りのヨコの紐に絡めて留められている。

アンツクは「簡単な型を用いて四角ばったのを作るし、何も用いず丸型はつくる⁽²⁾」という。したがって、以上のタテ・ヨコの配りからみて、アンツクの編み方はショイ・ズカリのそれと似たものではなかったと想像される。

アンツクの負い緒のつけ方も、他の編み袋と異って特有のものである。負い緒は、このアンツクの場合、長さ一九五センチで、まずそれをまんなかから二つに折り、第八図のように、輪になった方の二七、八センチを目にし、途中で玉結びにして留め、そして、残りを本体の縁の目に通し、一方の端を今作った二七、八センチの目に通し、もう一方の端と結びつける。負い繩の太さはやや太く四ミリで丸打ちである。⁽³⁾

註

(1) 標本の付け札による。

(2) 上江洲均氏『沖縄の民具』(慶友社昭和四八年刊)二九九頁。

(3) この資料の所在地その他について、饒平名健爾氏からお教えをうけた。ただし、その實際をみにいく約束をし

ながら、今回は行けなかった。編み方その他詳しく調べていただければと思う。

十 あとがき

小論では、編袋を一応「山で働く人たちが山仕事にゆくとき、弁当や山仕事の小さな道具などをいれて背負ってゆく、または腰につけてゆく山仕事用具」とし、旭川のサラニップ以下八例について、材料の採集・編み方の技術を中心に、形と使い途とのかねあいその他を、できるだけ実地に即して検討してみた。

いま、以上の結果を改めてまとめてみると第一表のようになる。

こゝで検討した編み袋は、もちろん、編み袋の全タイプを網羅したものではないけれども、以上の結果から、すくなくとも、次のことが明らかである。

一、まず、編み方については、双子・ネコ・網代(市松を含む)の三つの型がみられる。市松の系統の編み袋については、こゝではとりあげることができなかったが、愛知県北設楽郡下川村の「イジコ」など⁽¹⁾をあげることができ。三つの型のうち双子は八例全部に関係している。

二、しかし、編み袋の双子を、その編み方の實際にまで立ち入って確かめみると、さらに次の三つの型にわかれることが確められる。

第一の型は、村上のカズラ・テゴや広島のカマコシゴのように、俵編みのときと同じ用具を使って編むもので、この型では、当然のことながら、胴から先に編みはじめ、その後、底をかかるといふ胴―底型の作業手順が成りたつ。

第二の型は、ショイ・ズカリや八重山のアンック、それに、ショイ・ネコのように、小さな木の枠を使って編む型

第一表 編み袋の諸形態

内容 呼び名	所在地	材	料	計 測 値					編 み			用 具	手 順
				縦 cm	横 cm	厚 cm	重 さ	容 積	胴	底	方 縁		
サ ラ ニ ッ プ	旭川市	ガ	ヤ	26.0	22.0	10.0	238 ^g	260	双 子	フ ジ ロ	折りどめ 蛇 腹	(ナ シ)	底—胴型
ラ	新庄市	フ	ケ ビ	22.5	27.0	12.0	260	260	双 子 (立浦)	市 田	三ッ組 折り返し ネコフナ	(ナ シ)	底—胴型
カ ズ ラ・ラ ニ ッ プ	村上市	フ	オ ジ ラ	24.0	35.0	13.0	288	288	双 子	松	折り返し	ナ シ	胴—底型
シ ヨ イ・ズ カ リ	吉田町	イ	ラ ス	36.0	32.0	1.8	320	320	双 子	子	折り返し	ナ シ	胴—底型
シ ヨ イ・ネ コ	宮田村	フ	ラ	50.0	43.0	4.0	1,500	548	双 子	縫	折り返し	ナ シ	胴—底型
ガ ヤ・コ シ ヨ イ	八鋒村	ガ	ヤ	35.0	38.0	10.0	510	510	双 子 (立浦)	子	折りどめ	(ナ シ)	底—胴型
ラ	五箇荘	ス	ガ	35.0	33.0	1.5	144	144	双 子	子	折り返し	ナ シ	底—胴型
フ ソ ッ ク	石垣島	フ	ダ ソ	19.0	20.5	9.5	144	144	双 子	子	折り返し	ナ シ	底—胴型

である。この型にはシヨイ・ネコのように双子の特別な場合としてのネコ編の型と、シヨイ・ズカリやアンツクのように松葉くずしに編んでゆく型との二つの型が含まれる。作業の手順としては、ネコ編型が胴—底型、松葉くずしの場合は底も胴もいっしょに編んでしまう型である。

第三の型は、旭川のサラニップや九州山系のテゴ、それに新庄のテサゲのように、これといった用具の助けを借りず、手だけで編んでしまうものである。手順的には、この型では、底—胴型となる。

第一の型と第二の型のうちのネコ編み型は、ワラ細工の手法として一般化しているので、一応は、ワラ細工からの影響が考えられるが、俵編み様の用具の分布はワラの分布よりはるかに広く、この問題は、にわかには判断できないように思われる。残りの型についても、国内国外に類例があり、決して、新しい技術ではないように思われる。

三 編み袋は、山で働く人たちが、それぞれ思い思いに作り、そして使う、いわゆる自製の用具である。それがこの用具の形にも直接反映している。それだけにまた、個人的な工夫の幅は相当広いといわねばならない。編み袋の大きさ、重さには、だいたいの傾向は勿論みられるが、細かくは、それぞれ個人個人で、曲物のワッパ・メンバがはいるくらいの適当な大きさ、といった基準で決めているように思われる。

四 にもかかわらず、すくなくとも、こゝにとりあげた八つの編み袋には、一見してわかる外観上の特徴がみられる。こうした特徴は、編み方の型というよりも編み目の密度、それよりむしろ、材料自体の持ち味によってかもしれない。編み袋には、その土地土地の身近かな材料が思い思いに採集され、そして使われる。したがって、編み袋のいわゆる地域型には最終的に材料分布の上での地域性が強く作用していると思われる。編み袋の型の分布と材料の分布とは完全には一致しないが、編み袋の型の分布の一つの条件として、材料の分布は無視することができないように思われる。恐らく、むかし、その地域で編み袋を作ろうとした人たちは、ながい時間をかけて、できるだけ編み袋に適した材料を、あれこれと、根気よく探し出したのではなからうか。また、材料の処理や調整の技術も所によってさまざまである。編み袋の難しさは、むしろ材料の処理や調整の過程にあったといつてよい。

五 曾って山仕事をする人たちのあいだに、普遍的にみられた編み袋も、現在では、すっかりリニクやナツプに置きかえられ、おゝかた使われなくなってしまうたようである。しかし、このなにげない、そして、すぐれた文化遺産から何を学び、何を受けつぐかは、なお、私たちに残された課題ということができよう。

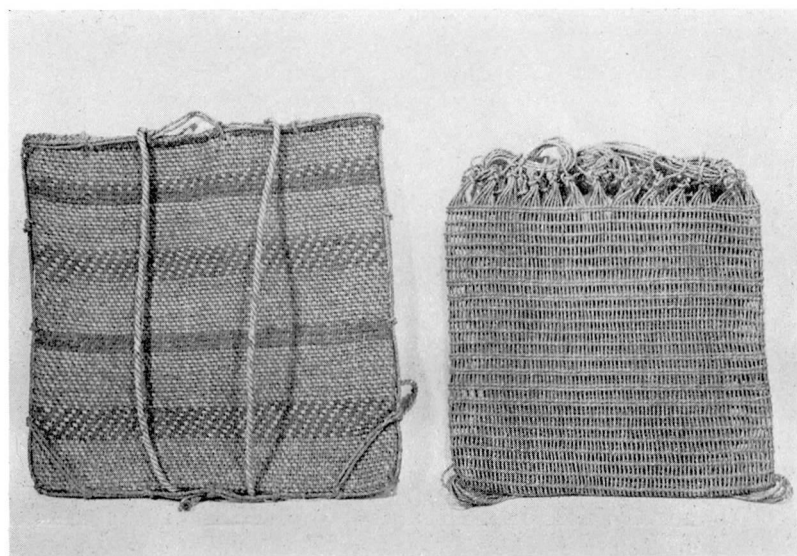
註

(1) アチック・ミューゼウム編『民具問答集』（昭和二十二年アチック・ミューゼウム刊）二六四―六五頁。イジコは檜の皮を市松に編んだもので、縦横とも三四センチ、奥行き九センチ、重さ一キロで、タテ・ヨコとも幅一五ミリから二〇ミリの帯状の皮で作られている。タテは厚さ一ミリで、二枚重ねていれられているようにみえる。またヨコは三重に巻いてあり。一段ずつかけられている。タテ・ヨコとも、たわめたときの折りキズが随所にあり、口の縁には形が崩れないように針金の芯がいれられている。負い緒は太さ七ミリの麻紐で、前の面の縁と後の面の左右両下隅とにかけてとめてある。使われている檜の皮は、秋、剥ぎとり、一番外の鬼皮を取り去り、

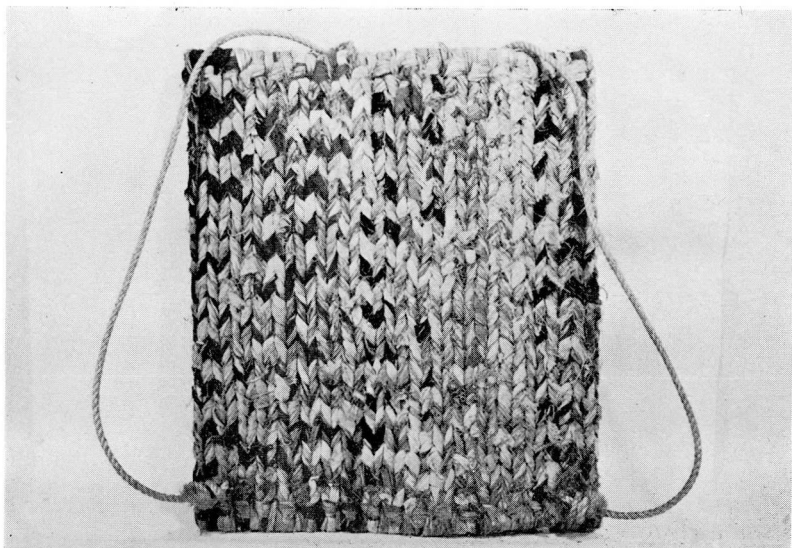
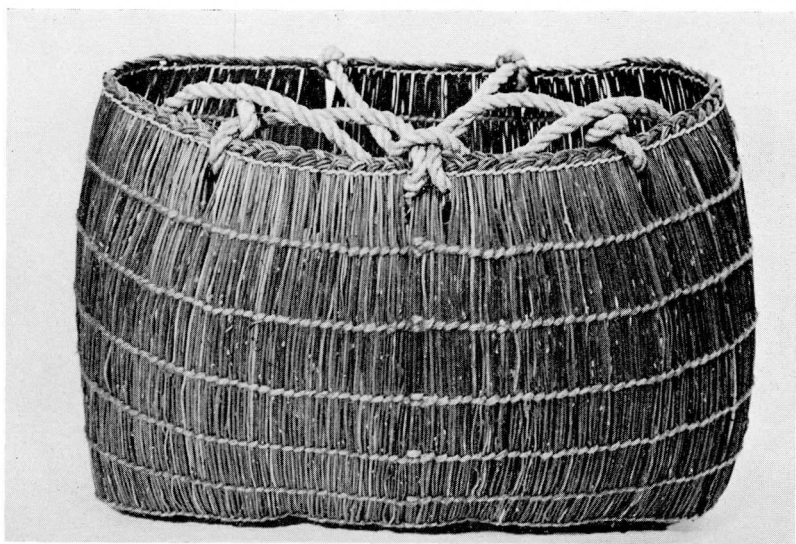
追記

本稿提出後、岡部真木子さんが日本常民文化研究所の民具マンスリー六巻四号に「背負袋について」をまとめておられるのを知った。岡部さんは私のいう編み袋を、蓑籠類、俵袋類、縄袋類、木の皮袋類、ネコ袋類の五つに手ぎわよく分け、「私が初めて背負袋を見たのは十二年前、福島県の檜枝岐村で、当時は誰もかれもが縄袋を背負っており、それが一つ一つ模様の入れ方、他の材で入れた配色の緯などが異り、民俗学に全く関心のなかった当時でさえ（いや、全く関心がなかったからこそ、「引用者」）目を見はらされた。一九六九年に背負袋の調査をまず縄袋から始め、その作り方を知ると、実にうまく考えられた」そのやり方に驚かされたと述べておられる。この認識は大切だと思う。そして、やはり編み袋と材料の分布とのあいだの関係そのたの問題を提起しておられる。お教えをいただいた岡部さんに心からお礼を申し上げたいと思う。

その下にあるアマカワの部分だけを使うのだそうで（同書二六五頁）、永江土岐次氏によれば、細工にかかるとえ、「水に漬け」「普通鉈を使って」割るという。そして「底から編みはじめ、段々上にあみ上げて口の部分を」作るという。この辺りではイジコの市松を「普通はイシダタミ」といい、「材料を描えてから編み上げるまでに、こまかいのも二茶間位（一日四食だから朝食・昼食の間と昼食・チャズケの間）、あらいものならもっと早い」そしてこの種の用具は「檜の皮、かんばの皮、藁等でも作る」。木挽や杣・山人足の人たちが「山仕事に出掛けるときに背負ってゆき、もっぱら、山仕事の道具や弁当をいれるのに使い、「畑に行くとき、買物等には用いません」（同書二六四頁）と報告されている。

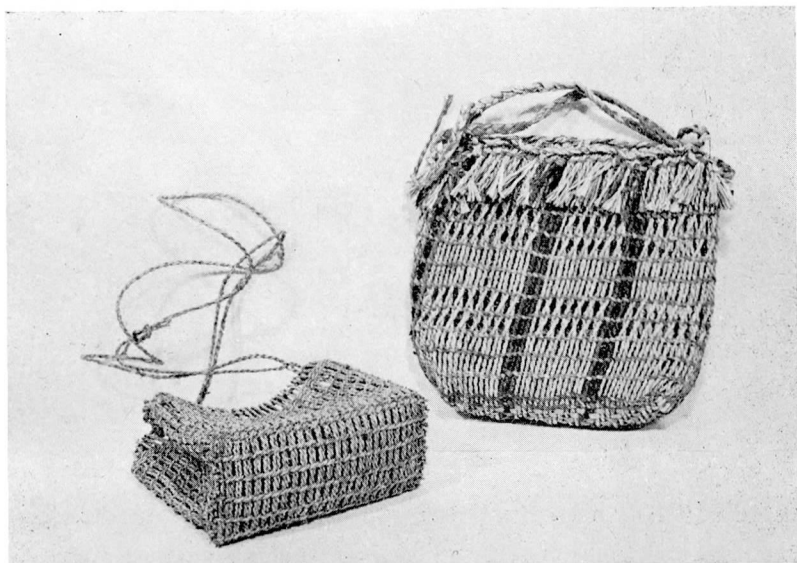
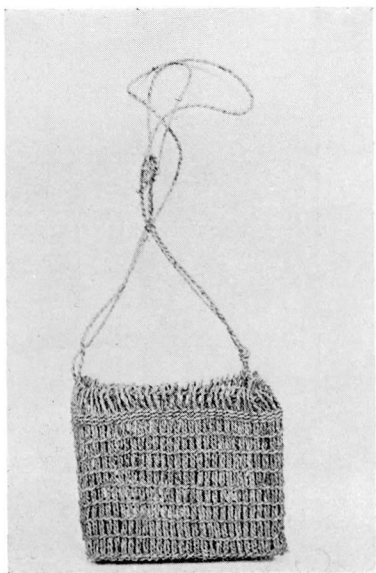


(上右) 新庄のテサゲ, (上左) 秋田ブドー・コダシ
(下右) ショイ・ズカリ(イチコ), (下左) 五箇荘のテゴ

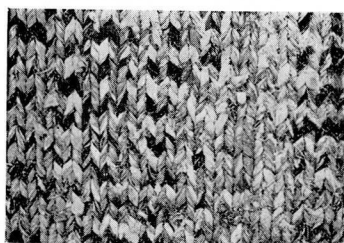
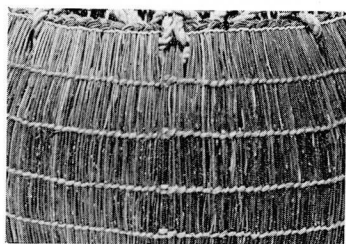
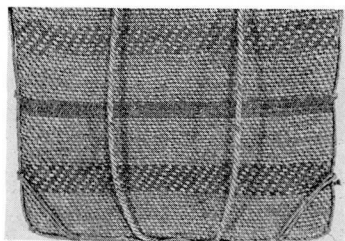
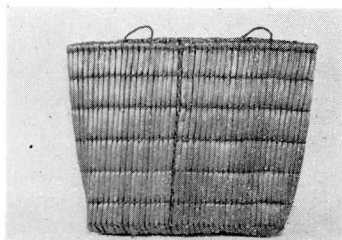
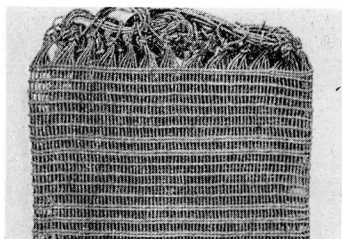
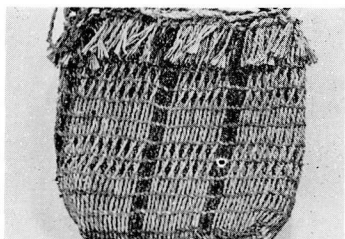


(上) 村上のカズラ・テゴ

(下) 伊那のショイ・ネコ



(上右) 愛知のイジコ, (上左) 石垣島のアンツク
(下右) 旭川のサラニップ, (下左) 石垣島のアンツク



(上右) アンソクの双子編

(上左) サラニップの双子編

(中右) テゴ

(中左) 広島のカマ・コシゴ

(下右) ショイ・ネコのネコ編

(下左) カズラ・テゴの双子編

